



発行所 日本工業大学 広報課 埼玉県南埼玉郡宮代町 郵便番号 345 電話 04803(4)4111

Clean & Green

緑化計画進行中 学内の美化に協力を

岡本保雄 図書館長 逝去される



図書館長の岡本保雄教授は、九月二十七日午前六時二十五分ごろ、腎臓がんのため東埼玉病院で逝去されました。享年六十

七歳。二十八日に通夜が、翌二十九日に告別式が、杉戸町馬頭院で執り行われ、多くの学内外の関係者が参列して故人の冥福をお祈りした。

教員人事異動

10月1日付

渡辺寛教授



熊沢佐夫助教



長谷川嗣彦助教



十月一日付人事異動が行われ、新任では機械工学科教授に渡辺寛氏、前棟株式会社日立製作所柳井工場・住宅設備技術専門学校の長が就任。また、熊沢佐夫講師(英語)と長谷川嗣彦講師(ドイツ語)が助教に昇格した。

文部省特別研究設備 高速フリーリアライザーが設置

文部省の五十五年度特別研究設備補助を受けて、高速フリーリアライザー(横河ヒューレットパカード製、価格二千九百七十三万円、内文部省の補助金一千九百八十二万円)が設置される。設置場所は機械実験棟M3(使用責任者大川陽康教授)である。

構成は、①振動波形一般の解析を行う5451Cフリーリアライザー、②大型構造物の振動モード解析プログラムを磁気ディスクに納めたモーダル解析パッケージ、③回転機械の動特性(RPM、タイムスペクトルマップ等)解析プログラムを磁気ディスクに納めたシグネチャー解析パッケージ、④写真右側にある英数字ディスプレイとグラフィックプロットニングの

機能をも備えたグラフィックターミナル、⑤このグラフィックターミナルに表示された画像を紙面に記録するプリンター、⑥同じくハードコピーのための4色グラフィックプロッター、である。入力信号はアナログで2チャンネル、周波数はDC~50キロヘルツ、電圧レベル0~8Vで、一般の測定器の信号はすべて取り込める。

解析処理機能としてはコンピュータと共に発展した高速フーリエ変換(Fast Fourier Transform)のアルゴリズムを用いて、正逆フーリエ変換、オートクロス・パワースペクトラム、伝達関数、コヒーレンス関数、自己相関関数、その他の豊富な解析が可能である。この機能を応用した構造物と回

転機械の振動解析が②、③のパッケージである。本機を用いた当面の研究テーマとして、システム工学科で1テーマ(斉藤)、建築学科で1テーマ(難波)、機械工学科で7テーマ(大川・村川・町山・寺島・横谷・玉木・梅崎)が計画されている。

'81日本工業大学学生募集要項

機械工学科(200) 電気工学科(200) 建築学科(200) システム工学科(80)

推薦入学		一般入学	
出願期間	11月1日~11月19日	出願期間	1月10日~2月14日
合格発表	11月26日	試験日	2月15日(筆答)・16日(面接)
入学手続期限	第1回目-12月10日まで 第2回目-1月24日まで	合格発表	2月20日
選考方法	書類審査	入学手続期限	2月28日まで
出願資格	本学が指定する工業高校(高校の工業課程も含む)の現役で、成績概評がB以上の者。志願学科と同系統の工業課程を履修していること。	選考方法	調査書、筆答・面接による総合審査
	(注) 出願書類等は高校の進路指導室宛に送付されます。	筆答科目	英語・数学・志願学科に関する工業科目
		試験場	本学



本機を用いた当面の研究テーマとして、システム工学科で1テーマ(斉藤)、建築学科で1テーマ(難波)、機械工学科で7テーマ(大川・村川・町山・寺島・横谷・玉木・梅崎)が計画されている。

晩秋随想

学長 三浦 鞆 郎



晩秋、初夏、晩秋と進んで来た。一年ももう終わりである。グリーンもつぎつぎと色が変わってきた。紅葉でいば美しいのは、中庭の草もみじである。雑草と軽蔑され、年に何回も刈られるあの名もない草が、生涯の終わりに、どうしてあのような美しい模様を描きだすのだろうか。全体として美しいばかりでなく、顔を近づけてよく見ると、一本一本みな可憐で、どうして雑草と、十把ひとからげにされてしまうのか、ふしぎなくらいである。

岡本保雄先生をしのぶ

追憶の記

学長 三浦 三浦 三浦 三浦

私が図書館長をしていたころ、学科主任や学生部長を歴任しておられた先生にはときおりお話を伺う機会がありました。館長室にもよくふりこみ入っていられたので、お話を伺いながら、長いことおしゃべりをしていました。私は漫談のほうが得意なもので、先生のお話には大学の現状や将来のことなどが多く、私もついつられて、柄にもないことをお話ししたこともあったようです。とにかく問題の核心を的確に捉える先生のお考えには、つねに敬服していました。

十周年記念のときには、実行委員長先生のもとで記念歌選定委員長をさせていただきましたが、いつも温顔に笑みを浮かべるだけで、すべてをお委せくださったのは、有がたく思っていました。

先生には昨年私の後任として図書館長をお願いしたのですが、そのときは先生のほかに館長は考えられないと思っていました。図書館長は、執行部からも学部からも離れて大学のまん中にでんと建っている図書館から大学全体をにらんでいるのが、その役目ではないかと考えています。その点では私は不適任でしたが、先生は創立以来の方々と考えておられましたから、まったくつづけていただけると、私もいすれ先生のとを追いかけられるわけですが、こんどお目に掛かったときは、その後の大学についての話をたくさん聞かせていただきます。



10周年記念行事発表会のとき、学生と一緒に校歌を歌われる岡本先生(左端)

岡本先生が永眠され、私も深く先生の御他界をいたむと共に、まことに惜別の念たえがたく、たゞ失うところの大きなを思うのみです。

先生は、本学創立以来、交流電気機械の講義を担当され、また長く電気工学科の主任教授として、学科の基礎がためと発展のために多大の貢献をされました。この間、学生部長を歴任され、昨年からは図書館長の要職につかれ、その御活躍が期待されておりました。

思い返せば、本学開学の直前昭和四十二年の春、駒場で大学教員の初顔合せの会が開かれた折に、私は始めて先生にお目にかかりました。もの静かで紳士的な先生、というのがその時の私の第一印象でした。以来、開学式を経て、最近に至るまで数えきれない程多くの会議、大小の会合、そのほか日常のちょっとした相談など、実に色々の場面で、先生に親しく御指導をうけ、また時には夜遅くまで意見を交わす事などもあって、その御気配をお祈りしています。

過ぎし日々の回想

電気工学科主任教授 大久保勝弘



53年鹿児島県進学説明会に行かれたときのスナップ (左から大久保教授、三浦学長、岡本先生)

先生は、本学開学の直前昭和四十二年の春、駒場で大学教員の初顔合せの会が開かれた折に、私は始めて先生にお目にかかりました。もの静かで紳士的な先生、というのがその時の私の第一印象でした。以来、開学式を経て、最近に至るまで数えきれない程多くの会議、大小の会合、そのほか日常のちょっとした相談など、実に色々の場面で、先生に親しく御指導をうけ、また時には夜遅くまで意見を交わす事などもあって、その御気配をお祈りしています。

先生は、本学創立以来、交流電気機械の講義を担当され、また長く電気工学科の主任教授として、学科の基礎がためと発展のために多大の貢献をされました。この間、学生部長を歴任され、昨年からは図書館長の要職につかれ、その御活躍が期待されておりました。

苦しみの中にも常に笑みが

岡本学生部長当時の 鈴木昭正 (現庶務課長)

先生のご病氣は51年4月血尿がでたことに始まりました。精密検査の結果、その年の8月に前立腺肥大の手術を、1年4ヶ月の長期にわたる通院のち52年12月に腎臓の摘出手術をされた。先生が学生部長に就任されたのが50年10月だから、学生部に来たから病氣になった、と冗談をいわれたほど在任中は病氣に悩まされていた。そしてこの間に大学は創立十周年を迎えることになり、先生は病氣をおして記念行事委員長の任をうけられた。半年の短い準備期間のため連日のようにスタッフの先生方と打合せ、調整が続いた。この行事で特筆すべきことは、それまでにはなかった学生自治会の全面協力が得られ、学生と大学側が一体となって実施できたことである。先生のご尽力であった。

これは先生の忙しさを倍加したが、先生諸君との語りは実に楽しそうであった。夜遅くまで

長い思い出

先生とは四十年余りの お付き合いをされた 中島清一

先生は、本学開学の直前昭和四十二年の春、駒場で大学教員の初顔合せの会が開かれた折に、私は始めて先生にお目にかかりました。もの静かで紳士的な先生、というのがその時の私の第一印象でした。以来、開学式を経て、最近に至るまで数えきれない程多くの会議、大小の会合、そのほか日常のちょっとした相談など、実に色々の場面で、先生に親しく御指導をうけ、また時には夜遅くまで意見を交わす事などもあって、その御気配をお祈りしています。

先生は、本学創立以来、交流電気機械の講義を担当され、また長く電気工学科の主任教授として、学科の基礎がためと発展のために多大の貢献をされました。この間、学生部長を歴任され、昨年からは図書館長の要職につかれ、その御活躍が期待されておりました。

弔辞

岡本先生、ここに先生の追悼の言葉を述べることになりました。私は、私たちの夢だにしながらお話を伺いました。先生に御指導いただいたあれこれ思い出され、あの時、この時におっしゃられた言葉の一つ一つがよみがえって、どんなにかたくさん良い教訓を、私たちが先生からいただいたことかと思つた。改めて心からありがたう思い、もはやご相談したいことがあつてもうかがうことのできないのが、本心に心もなしく思われます。学生部長であられた先生は、自治会の、そして、学生の窓口として、私たちの意見を大学に反映して下さいました。また、図書館長であられた先生は、私たち利用者の立場に立つて考えて下さいました。ましてや、電気工学科の学生にとりましては、並々ならぬ指導をいただきました。このうえはご遺訓を胸に止め、いつまでも先生をしのぶよすがといたし、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(学生代表・海宝 毅君)

卒業後もやさしかった先生

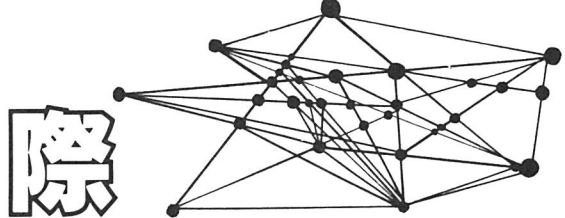
電気工学科二期生で 岡本ゼミに所属した 佐川順治

先生は、卒業生に「卒業生の誰々へは、どうぞおめでとう」とか、「君の商売の方はどうか」というふうに、卒業後の私たちのことをいろいろと気遣って下さるやさしい先生でした。

そんな岡本先生と最後にお会いしたのは、今年の四月、友人の結婚披露宴の席上でした。その時は旧岡本ゼミの同窓会のように、先生は病氣前と少しも変りなく楽しんで談笑され、今度はゴルフをやろう、と約束されたのですが、こんな悲しいことになり、残念でなりません。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

会議



国際

国際地理学会に

出席して

竹内淳彦教授・工業地理学

本年の八月二十五日から三週間、国際地理学会（IGU）の第二十四回大会が東京で開催された。IGUの大会は四年ごとに開かれるもので、アジアではじめての大会である。会議には世界八十四ヶ国から約二千五百人の学者が参加し、熱心な討論が行われた。なお、大会の初日にはIGUの記念切手も発行されている。

「工業システム」コミッションは、おもに工業の立地問題、工業地域の形成・地域政策における工業の役割などについて研究するものであり、IGUの中心的な機関の一つである。メンバーとしては経済学分野の出身者も多く、いずれもそれぞれの国の産業立地政策立案の中心的役割を担っている。

今回の会議は八王子市に新しく建てられた中央大学で八月二十五日から三十日まで行われ、筆者は日本側委員として開会の前日から中大に泊り込みで運営に当たった。

開会式は、IGU会長である英国王立地理学会の会長でもあるワイズ教授をはじめ、アメリカ、ドイツ、東ドイツ、スイス、フランス、カナダ、ポーランド、オランダ、ノルウェー、スエーデン、ブラジル、インドなど二十三国から世界の第一線で活躍中の工業地理学者のほとんどが参加して行われた。

本格的にペールを脱いだ日本生まれの理論や、日本工業の現実に参加者は一様に強い関心を示したように思う。開会式のあとのレセプションでは多くの出席者の質問やコメントへの対応で汗だくの有様であった。外国の学者がとくに興味をもった点は、日本の工業が京浜の技術集団を核として、全国的システムを形成している点であり、とくに英国とくくロンドンの工業問題に取り組んでいるワイズ教授やホンコン研究の権威シット教授とは掘り下げた議論を行った。

最終日には座長をさせられるなど、まさに冷汗のかき通した。筆者がこのシンポジウムを通し、とくに感銘したことは、かつて、まったく学界で異端視されながら、研究をはじめ、何とか形がついた筆者の理論が、ほぼ同時に発表されたハミルトン教授の理論と四つに組み、火花を散らし、お互いに充実し合えたことである。この西と東の国柄を反映した非なる理論を柱に、このシンポジウムの議論は大いに高められたように思う。

毎日仲良く食卓を囲み談笑していた東・西ドイツの学者、毎夜テレビのニュースに自国の明日を想うポーランドの学者、日本の自動車輸出を非難したアメリカの学者、食堂でソ連の音楽を止めさせ、またサヨナラパーティーで肩を組んで重艦マーチを合唱した東欧の学者達、肉中心の食事を怒ったインドの学者。今回の国際会議を通して、筆者は学問的収穫を得るとともに、生きた世界の息吹を強く感ずる事ができたように思う。

シンポジウムで、開会講演をうけて、シンポジウムが三日にわたって行われた。毎日三名の指定報告者を中心に白熱した討論が続けられ、議論はいつも夕食後の談話室まで尾を引いていた。シンポジウムで筆者は発展途上の工業化についてコメントを求められ、また、

現地討議・その他で、シンポジウムのあと現地討議が二日行われた。現地を見て考えることは地理学では不可欠である。講演の内容を現地に示すという目的もあり、全行程を筆者が説明した。第一日は工業化と都市化の波の中にある相模原市と、日産自動車工場を中心として行われ、第二日は川崎市と日本鋼管製鋼工場から城郭、都市部を経て城東地区の中心台東区の靴工業と浅草の見学をおもな内容として行った。

全体を通じ、日本工業の技術革新ぶりを目的にみて一様に驚嘆したことは当然であるが、



開会講演中の筆者 (シンボルマークは本学学生作成)

55年度海外研修一覽

- 辻陽一講師(英語) 「アメリカにおける学術調査と研修」
- 三吉正光教授(建築学科) 「東欧諸国の中世都市建築視察」
- 広川勇一郎教授(建築学科) 「空間デザイン調査のため西ヨーロッパの都市ならびに建築の視察」
- 熊沢佐夫助教(英語) 「現地調査」

「過去十年間にわたり採集を続けた現代アメリカの口話・俗語表現の疑問点の解明」

「ウィーンにおける第11回国際工業会議出席および西欧の省工ネルギー技術」

「波多野純講師(建築学科) 「ネパール王国古宮の研究と現地調査」

「開会式で特別講演 会議の初日は開会式であるが、そこでの開会特別講演を筆者が引き受ける破目になった。これは、オランダで開かれた準備委員で日本のオリジナルな理論ということで白羽の矢が立ったのだそうだ。学園の強力な日本で筆者が選ばれたのは、外国人の会議で決められたためであろう。

筆者の講演は工業の地域的生産体系を東京大都市圏を中心に論じたものであったが、初めて

シンポジウムの座長をつとめる筆者。左はリンジ教授(オーストラリア)、右はサボイ教授(フランス)

シンポジウムの座長をつとめる筆者。左はリンジ教授(オーストラリア)、右はサボイ教授(フランス)

シンポジウムの座長をつとめる筆者。左はリンジ教授(オーストラリア)、右はサボイ教授(フランス)

シンポジウムの座長をつとめる筆者。左はリンジ教授(オーストラリア)、右はサボイ教授(フランス)

電気接点国際会議に

出席して

高橋篤夫助教・電気工学科

八月二十五日から二十九日までアバーストで開催された第十回電気接点現象に関する国際会議に出席し、その後東ドイツ等の工業大学等を訪問する機会を得た。この出張にあたっては、本学学外研修制度の適用を受け、三浦学長はじめ大学および学園の多くの方々にお世話になった。ここに心からお礼を申し上げたい。今回はスペースの関係上、国際会議を中心に述べる。

この国際会議は二年に一度行なわれており、一九七六年には東京で開催された。共産圏では初の開催であり、その意味からも緊張した気持ちでアバーストに向った。二十三日十九時二十五分私の乗ったマレプハンガリー航空五八八便はアバーストのフェリヘン空港に着いた。入国手続きも意外に簡単に済み、早速ホテルに向かう。空港からホテルまで約四十分、現地通貨で、約三十ポンド(二ポンドは約十二円)と、ますタクシー一代の安さにホッとす。夜のことでタクシーの通った道は不明だが、市街の中心を通り抜け

たにしては暗い都市という印象をうけた。翌二十四日、午後から出席者の登録が始まるため、会議場に向かう。ホテルはマルギット島の端にあり、会場まで徒歩で一時間以上かかりそうなのでバスで行くことにする。しかし問題は切符の買い方である。ヨーロッパでは一般的に、ワンマンバスの運転手は運転専門で切符のチェックはせず、乗客自身が切符を切るシステムである。仮に切符を持っていても乗れるが(事実として)切符が買えず、運転手が無料で乗せてくれたこともある。たった料金一・五ポンドのため検札(実際には殆んどない)に引っかけられても構わない。共産圏のこと、なおさらである。とにかく切符を手に入れ会場付近にいった。会議場の建物名はEngineering Houseとなつてはいるのだが、当該地付近をいくら探してもわからない。もっとも英語名が書いてあるはずもなく、通行人に聞いても言葉は通じず適当な返事しか戻ら

てこない。国会議事堂に近く、日曜日のため地元の人があまりにいなかったためであろうか。いざいざと、三十分近くうろうろしたあげく、思いきって見当をつけた建物に入り、二階(ヨーロッパ式では一階)に上り、やと会場であることが判明した。日本なら、うるさい程看板や貼紙があるのが普通だが、こういう点はお国柄としか解釈の仕様がなない。現地人の出迎えを受けたい人以外は皆閉口した様である。二十五日のオープニングセッションでは、ハンガリー金属機械工業省の Miklos Kozma 副大臣を議長として、 Jozsef Lukacs 電気工業研究所長の祝辞、および国際連合委員長 R. E. Armingon 教授(アメリカ、イリノイ工科大学)のあいさつが行なわれた。

ある日本人の話では、共産圏での会議としては時間的にも割合正確に運営されているとのことであった。引続き論文発表となり、二十九日までに約百件(日本からは十二件)の発表が行なわれた。分科会形式でないため、

五日間で百件をこなすのはかなり困難で、発表件数の多かった「リードリー」、「銀ベースコンタクト材料」の二つのセッションは、パネル討論形式で行なわれた。これは通常のパネル討論とやや異なり、十件以上の論文の概要を議長がまとめ、その後発表者が論文の特徴を五分位で発表する形式で、時間節約が主目的である。

私の発表論文は、コンタクト開離時における大気中と真空中とのアーク放電継続時間の相違と、電圧-電流平面におけるアーク軌跡との関連を論じたもので、二十五日午後発表を終えた。質問はむしろ休憩時間に個人的に多かった。特に会議終了後に訪問した東ドイツのカールマルクスシュタット工業大学では、以前に発表した論文を含め、多くの熱心な質問をうけた。

二十六日には、テクニカルビジットとしてKonarkaというリレー等の製造会社を見学した。日本と比較すると全体的に自動化も遅れているようであり、特に労働者が煙草を吸いながら作業をしていたこと等は、考え方の相違があるとしても奇異に感じられた。

ドナウ川によってアバーストとペスト地区に区分されるアバーストは到着時の暗い印象と異なりなかなか魅力的な都市であった。もっとも八時半から五時半までの会議、その後のレセプション等と日程に追われ、三時間のバスツアーに乗る位がせいぜいであつたが、会場への往復の合間にふれた雰囲気は、毎年の外国からの観光客が国の人口より多いというハンガリーの魅力をかき見させてくれた。ゲレルトの丘から眺めた街並など、西欧の都市にない落ちつきを感じさせられた。二十三時頃まで運行するバスや市電(一回一ポンド)等の交通費を含む物価の安さ、治安のよさ、人々の親切等は、共産圏故の多少の不便(これも東ドイツ程ではなかった)を割り引いても、むしろ西欧より充実した旅の機会を期待しつつ、八月三十一日東ドイツ国営航空インターフライト三三便で、ドレスデンに向けてアバーストを後にした。



現地討議でワイズIGU会長(右)と語る筆者



会議の席上での筆者(右端)

